



コロナが妨げる「正しい」時間の使い方 文学が描く正体の解らない相手

担当 人文学部 エムデ・フランツ
国際総合科学部 仁平千香子





パンデミックの具体的な描写：

鴨長明『方丈記』 12世紀、**ボッカチオ**『デカメロン』 14世紀、
デフォー『ペストの記憶』 18世紀、**ポー**『赤死病の仮面』 19世紀、
カミュ『ペスト』 20世紀

⇒ 時代を超える共通点：

- 古代・現代：疫病を自然の一部として受け入れるかどうかの姿勢 → 「zeroコロナ」対「withコロナ」
- ロックダウンと隔離：孤独、行動の乱れ、蔓延拡大
- 自己判断と自己責任：情報や指示に抵抗、拒否それとも納得
→ コロナ、政治、医療関係者：「自由」と「時間」の泥棒？
- パンデミックの時間と自分の時間：矛盾かどうか
- 情報の氾濫：真偽が不明、判断力の低下、迷信





日常の崩壊：人間や自然に心理・精神的な影響を物語る文学：
ベケット 『ゴドーを待ちながら』 1954、**安部公房** 『砂の女』
1962、**カフカ** 『巣穴』 1923/1931、**ハウスホーファ** 『壁』 1963

- **予想外そして不可逆変化な出来事**：生活や人生は前後に分裂、迅速な日常の復活と感染拡散を緩める要求の対立
- **恐怖感**によるマヒや束縛：解決が見えない
- **時間の分散化**：失われた時間を取り戻したい欲求、時間的感觉は層化する：心、自然、歴史、時計の時間

提言：文学は人間における異常、理解不可能、理不尽のことを**実験的に「物語」に訳**すること、時間や時代、文化や分野を超えて人間の内外の世界を総合的に見つめる
豊かなアーカイブである。





参考文献の一部

- 鴨長明『方丈記』、「古典を読む方丈記」 築瀬一雄著 大修館書店 1981
- キャンベル、ロバート編『日本古典と感染症』 角川文庫 2021.
- 安部公房『砂の女』 新潮社 2003年
- カフカ、フランツ『巢穴』 池内紀訳、カフカ小説全集 6、白水社 2002年
- カミュ、アルベール『ペスト』 宮崎嶺雄訳 新潮社 1968年
- ハウスホーファー、マルレーン『壁 (Die Wand)』 諏訪功, 森 正史訳 同学社 1997年
- ベケット、サミュエル『ゴドーを待ちながら』 安堂信也, 高橋康也訳 白水社 2013年
- ベック、ウルリッヒ『危険社会』 1988年 法政大学出版局 1998年
- セール、ミシェル、米山親能訳『五感一混合体の哲学』 法政大学 1991年



山口大学研究プロジェクト
コロナの時間学 ～新型コロナウイルスが人間と社会に対して与える時間的影響～

研究成果報告書

主研究者	エムデ・フランツ	所属	人文学部人文学科
共同研究者	仁平千香子	所属	国際総合科学部
研究課題名			
コロナが妨げる「正しい」時間の使い方～文学が描く正体の解らない相手			
研究内容と成果の概要			
<p>本プロジェクトの目的は、文学作品を通して2020年から続く新型コロナウイルスの影響、特に日常を奪われる経験が精神に与える影響について考えることである。選んだ作品は大きく2つのグループに分けられる。1つ目は疫病の流行や大災害を扱っている作品で、日本の鴨長明の『方丈記』(1212)、イタリアのジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン』(1348～1353)、イギリス作家ダニエル・デフォーの『ペスト』(1722)やフランス作家・哲学者アルベール・カミュの『ペスト』(1947)を含む。2つ目は、日常の大きな変化によって高められる恐怖や不安が、判断力やアイデンティティの喪失など精神的・心理的苦痛を引き起こす状況を描いた作品で、当時オーストリア帝国ドイツ文化圏であった(現チェコの首都)プラハ出身のユダヤ系作家フランツ・カフカの『巢穴』(1923/24)、オーストリア作家マルレーン・ハウスホーファーの『壁』(1968)、アイルランド作家サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』(1952 公開)、日本の阿部公房の『砂の女』(1962)を含む。</p> <p>今回のパンデミックは、過去の「スペインかぜ」などの疫病に比べれば死者数は少ないが、すっかり科学や医療体制などに自信と信頼を持っている現代の我々にとって、かなりの不安を伴う未曾有の現象である。実際の感染による被害以外に、移動や活動の自粛、ソーシャルディスタンス対策やマスクの常用、休校やオンライン授業の実施などによって影響を受ける国民も多く、またそれにより様々な不自由や経済的、また精神的被害が報告されている。時代を超えたこれらの作品に共通することは、危機に直面した際に陥る非合理的な行動や、噂や迷信を鵜呑みにした無知な行動に関して人間の心理には基本的な変化がないということである。これら一連の混沌した状況に対し、文学は重要な洞察を提供する。この実態を考慮すれば、疫病自体の影響と、様々な変化と制限が日常に与える影響の両方を明らかにすることが今回のパンデミックを理解するに有益であると判断した。以下では、二つ目の作品群についてまとめる。</p> <p>カフカの短編小説『巢穴』は、作家のディストピア作品の中で最も具体的、かつ抽象的な作品である。地下に住む一匹の動物が自分の巣穴の拡張について話す。その原動力は差し迫る絶対的な恐怖である。しかし語り手は語りの内容を二転三転させ、語り手が感じている危険がどれほど根拠のあるものかは読者には分からない。圧倒的恐怖に対峙する生き物の行動は、今日の私たちがリスク回避に奔</p>			

走する姿と重なる部分がある。

ハウスホーファーの『壁』は、突然現れたガラスの壁に遮られた世界で生きることを強要される女性の物語である。壁の向こう側では生命は絶滅し、こちら側には女性と数匹の動物がいるだけである。それまでの時計を確認して生活する日常は意味を失い、自然の流れに合わせて季節の恵みに頼って生きる生活に変わる。壁が消える兆しはないため、一方この女性は以前のように社会（家族、職場、社交）に振り回されず自己実現が出来る。他方彼女は、生命が破壊されたディストピアの世界の不確実な状況で孤独に生きている様子が描かれる。

ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』は、時間と空間が意味をなさない世界を展開する。主人公である2人の浮浪者は、主体性を放棄し、無気力に陥っている。彼らは、ひたすらゴドーと呼ばれる存在を待ち続けるが、ゴドーが何者なのかわからない。二人は、自らの判断力や想像力を捨てて、すべての行動を姿の見えない誰か（メディア、インフルエンサー、世論操作など）に委ねて、ただ待つべきということだけを信じ、来ない日々を虚しく過ごす。この作品は、歴史を忘れ将来への目標を失った近代人の未来像を映し出すが、いつ来るか保証のない「コロナ後」の世界を待ち侘びる未熟な人々の現状を象徴的に描いている。阿部公房の『砂の女』は、砂丘に昆虫採集に来た男が、村人によって砂穴の家に閉じ込められる話である。試行錯誤をして脱出を試みるも全て失敗し、次第に男は抵抗をやめ従順になっていく。突然日常が失われる経験とそれへの反応は、コロナによって様々な制限と変化を強いられる私たちを知る上で有効な視点を提供してくれる。

これらの作品を読み合わせると今回のコロナウイルスによって引き起こされた混乱とその人々への影響に関して理解を深めるヒントがある。突然それまでの日常が奪われる経験は、人々から雛形を奪い、多くの方は状況に適した新しい雛形を探す。しかし今回の一連の騒動からもわかるように、性急に与えられたその場しのぎの対策は、必ずしも十分な時間をかけて包括的視点によって練られたものではなく、対策の副作用ともいえる事態があらゆる側面において影響を与えている。今回のパンデミックを多角的視点からその多層的構造を理解するために、文学作品が果たす役割は大きいと考える。

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

これまで資料収集と作品分析を中心に行い、随時研究会を実施した。現在、研究発表に向けて準備を進め、『時間学研究』と人文学部の『異文化交流研究』への論文投稿を予定している。

研究内容に触れた出版物：仁平千香子「待つことが目的と化した人生の行方——『ゴドーを待ちながら』を読む」『表現者クライテリオン』2021年11月号。